兄がくれた夢

流山市立おおぐろの森中学校　三年
布施（ふせ）　琥雅（らいが）

皆さんは、「きょうだい児」という言葉を知っていますか。きょうだい児とは、障がいや難病のある兄弟姉妹をもつ子どものことです。

僕の兄は二歳年上で、重度の自閉症があります。知的障がい、多動、注意欠陥、聴覚過敏、強いこだわり、偏食、奇声をあげてしまうことなど、さまざまな特性があります。特に兄はコミュニケーションが苦手で、簡単な言葉でしかやり取りができません。また、人への関心もあまりないため、兄弟げんかすらまともにできません。一度くらい殴り合うような兄弟げんかをしてみたいと思うこともあります。しかし、実際にやったら弟の僕の方がやられてしまいそうなので、優しい兄で良かったのかもしれません。

そんな兄と暮らすことが、僕にとっては当たり前でした。小さい頃の僕は、兄のことを普通だと思っていました。しかし、大きくなるにつれて、周りの友達の兄弟と比べて、「なんか違う。」と感じるようになりました。そこで母に尋ねると、兄の自閉症について教えてくれました。しかし当時の僕は受け入れることができず、「普通の兄弟が欲しい！」と言ってしまいました。すると母は、「そうだよね。ごめんね。」と言いました。あの時の母の悲しい表情、そして受け入れることはできないけれど受け入れるしかないという、どうしようもない気持ちを今でもよく覚えています。

そんな経験をしてきた僕ですが、学校では友達と冗談を言い合って笑い合う、ごく普通の中学生として生活しています。しかし、その何気ない会話の中で、「はあ？　お前それ障がいじゃん！」とか、「障がいかよ！」という言葉を耳にすることがよくあります。もちろん、みんなに悪気はありません。ただ、からかうための言葉として使っているだけだと思います。僕自身も、その場のノリで言ってしまうことがあります。でも、その言葉を聞いた後や、言ってしまった後には、「ああ……。」という何とも言えない怒りや罪悪感が残ります。

なぜなら僕は、障がいのある兄と、その兄を支え続けてきた家族の姿を見て育ってきたからです。僕の家では、兄の障がいによって日常生活のさまざまな場面で工夫や支えが必要でした。例えば母は、兄が偏食なので献立を考えることにとても苦労していました。ある週には、カレーや唐揚げが二回

も食卓に並んだことがあります。また、兄にはさまざまな場面で付き添いが必要だったため、両親は働く時間を減らして兄を見守り続けていました。兄がショッピングモールなどで走り出してしまった時は、足の速い僕が追いかけたり、父がいない時は男子トイレに付き添いました。僕自身も、僕なりにできることで家族を助けてきました。それでも、それ以上に大変だったのはやはり両親です。兄の行動に気を配りながら生活し、将来のことを考え、悩みながらも毎日支え続けてきました。思うようにいかないことや、周囲に理解されないこともたくさんあったと思います。それでも兄と向き合い続けてきた両親の姿を、僕はずっと見てきました。

だから僕は、「障がい」という言葉を人をおとしめるために使ってほしくありません。障がいという言葉の向こうには、困難を抱えながら一生懸命に生きている人がいます。そして、その人を支えようと頑張っている家族がいます。僕が怒りや罪悪感を覚えるのは、そのことを兄や両親から教えてもらったからだと思います。

両親は兄のことばかりではなく、僕のことも大切にしてくれました。土日の少年サッカーには毎週付き添ってくれましたし、習い事の送迎、最近では部活動の応援にも来てくれます。兄に手がかかる中でも、僕のことを忘れずにいてくれました。そんな両親のおかげで、僕は兄への嫌悪感を抱くことなく育つことができました。

今振り返ると、兄との生活や両親の姿から、僕はたくさんのことを学んできたのだと思います。僕はこれまで、兄との生活を通して、障がいのある人が日常の中で多くの困難を抱えていることを知りました。そして両親の姿を通して、その人たちを支える家族にも大きな苦労や悩みがあることを知りました。その経験は、きっと僕にしかない大切な学びだったと思います。

だから将来は、特別支援学校の先生になりたいと考えています。障がいのある子どもたち一人一人に寄り添い、その子たちが安心して学校生活を送れるよう支えたいです。また、その子どもたちを支える家族の気持ちにも寄り添う先生になりたいです。僕は兄から、障がいのある人の困難を学びました。そして両親から、人を支えることの大変さと大切さを学びました。だからこそ将来は、障がいのある子どもたちだけでなく、その家族にも寄り添える特別支援学校の先生になりたいです。

この経験を生かしながら、障がいのある人も、その家族も安心して暮らせる社会づくりに貢献できるよう、これからたくさん勉強していきたいと思います。